個が生きる図画工作科の指導と評価

中　神　裕　子

1．はじめに

(1)　図画工作科の目標

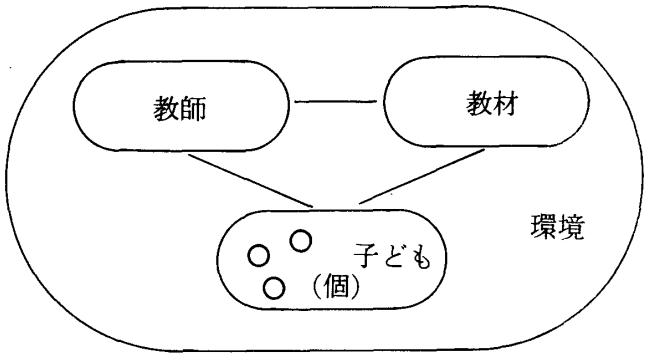
子ども一人一人は，自分の思いや考えを持ち，自分なりにふくらませて，その実現を目指して生きている。そして，その思いや考え，感じたことを表現したいという本能を持っている。造形的な表現及び鑑賞の活動を通して，その表現本能を満足させ，創造的心情を持った豊かな人間を育成していくのが，図画工作科の目標である。

(2)　個が生きる図画工作科授業

図画工作科における「個」は，表現の思いや意欲，発想や構想，造形的な見方・感じ方・考え方，具体的な方策，いろいろな試み，創造的技能，好み・・・など，その子を特徴づけるさまざまなことがらに表れてくる。これらは，比較されたり，規定されたりするものでなく，すべてその子らしいよさととらえることができる。したがって，個が生きる図画工作科の授業とは，一人一人の子どものよさが生きるような授業と言いかえられる。子どもたち一人一人が，主体性を発揮することが保障され，その思いが出せるような「子どもの側に立った学習活動」が展開される授業であるといえる。

(3)　図画工作科授業と評価

授業は，子どもと教材，教師及び環境などのかかわり合いによって，成立する。その中心は，あくまで一人一人の子どもである。子どものよさと教材のよさ，教師や環境などのよさが互いに高めあって，子どものよさが生きる授業になることから，よりよい評価を考えていきたい。



① 教材（題材）の持つ価値

教師が，教材をどのように評価し，子どもに提示するかは，子どものよさを生かすために，重要な意味を持つ。子ども一人一人が主体的に自分の表現の思いが持て，自分に適した表現の方法ができるものを開発していかねばならない。教師が教材の価値を見抜く目を養うことが必要であろう。造形活動を積み重ねる中で，子ども自身にも，教材を評価する目が育っていくことが望ましい。

② 教師の評価

出来上がった作品には，その子の思いがつまっている。しかし，その思い以上の思いが，つくりあげられるまでにめぐらされている。ああでもない，こうでもない，もっとよいものを・・・というように，思いめぐらされているはずである。したがって，これまでのような作品主体の評価でなく，主体的な行為を支援する評価をすることが，子どものよさを生かすことにつながる。その評価は，子どもの気持ちに沿った共感的理解，幅のある認め，考え動き出すきっかけをつくる言葉かけなどが主となる。また，子どもたちが，自分のよさを実感できるような共感的な理解や評価を忘れてはならないだろう。

③　子どもの評価

子ども相互による評価は，二つの側面を持つ。一つは，友だちのよさに気づくことにより，自分の表現の幅が広がり，互いに認め合い，高めあうことができるという面である。もう一つは，友だちからの認め・励ましにより，自信を持つことができ，よりいっそう造形活動を楽しむことができるようになるという面である。自分自身のよさに気づくことができるのである。子どもの評価には，その子自身による自己評価もある。自己評価の活動を絶えず繰り返して行うことは，自己評価の能力を高めていくことになる。自己評価することにより，自分のよさに気づき，次への新しい課題を生み出すこともできるのである。

以上のように，よい教材があり，子どもを中心として，教師評価・相互評価・自己評価が，有機的に絡み合い，作用してこそ，子どものよさが生きる授業となると考える。

2．材料をもとにした造形遊び

学習指導要領の改訂において，子どものよさを十分に発揮できる図画工作の学習活動をつくりだすようにする観点から，重視されたことがある。それは，「材料をもとにした造形遊び」を，第4学年までに位置づけ，かつ第6学年まで発展できるようにしたことである。

造形遊びは，子どもたち自身が素材と出会い，それを手にしながら発想を広げ，素材との遊びを見つけ，発展させていくものである。つまり，子どもが自分の思いを持ち，主体的に造形活動を展開し，自分のよさを発揮することをねらいとしている。

材料をもとにした造形遊びの指導と評価を考えていくことは，個が生きる授業の指導と評価を考えていく基盤となるのではないかと考え，今年度は，造形遊びの実践をもとに研究を行った。

3．研究仮説と検証方法

どのような手だてを講ずれば，個が生きる授業となるのか，評価に視点をあてて，次のような研究仮説をたてた。

(1)　研究仮説

仮説1

子ども一人ひとりが興味・関心を持ち，意欲を持つ題材を開発するならば，子どもは主体的に造形活動を展開していくであろう。

仮説2

造形活動の過程において，子どもを生かす評価の工夫がなされれば，子どもは主体的に造形活動を展開していくだろう。

(2)　検証の方法

そのための実証方法として，つぎのことを考えた。

①実践記録をもとに，題材と児童とのかかわりを検証する。
②子どもの活動を観察したり，図工カードや感想を整理して，検証する。

4．指導事例　第４学年　材料をもとにした造形遊び「よみがえれ，ぼくの木・わたしの木」

(1) 題材について

この題材は，台風19号の被害により折れたり倒れたりした木の枝を用いて，自分なりの考えで美しく飾り，木を生きかえらせようというものである。子どもたちは，入学以来親しんできた木々に愛着を持っており，その枝が切り落とされたことに心の痛みを感じている。その思いを，木の枝を使っての造形活動に託し，自分なりの美しさを追求させていきたい。

本学級の児童は，造形活動に対して意欲を持ち，様々な用具や素材に関心が強いが，思いのまま表現できるまでには至っていない。２学期になって，木片をのこぎりで切ったり，釘を打ったり，針金を用いたりの活動を行っている。この題材は，それらの既習経験を生かして造形活動を展開でき，しかも子どもなりの工夫の広がりが期待できる題材である。

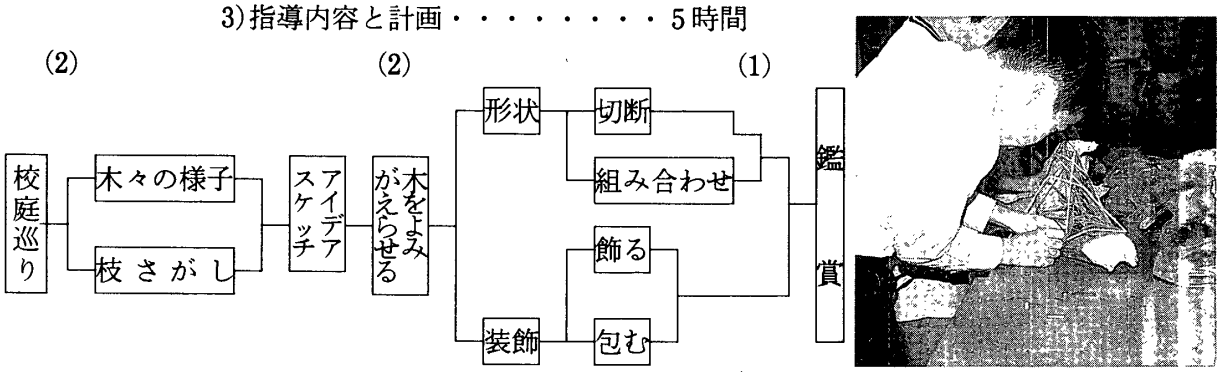
(2) 指導目標

1．　木々をよみがえらせる活動を通して，造形遊びの楽しさを味わわせる。

2．　木々に思いを込めて，自分なりの工夫をさせる。

3．　自分や友だちの作品のよさを認め合う態度を養う。

3)指導内容と計画・・・・・・・・・５時間



(3) 授業設計の焦点

校庭の片隅に放置された木々や枝に対して，それぞれが思いを持ち，かかわっていくことが，この題材の大きなポイントである。したがって，その思いをどのように持たせ，どのように生かしていくかが，この授業設計の焦点といえる。そこで以下の点に留意した。

○　木々に対する思いをしっかりと持たせる。

実際に校庭を回りながら，木々の様子をよく見させていく。また，入学時からの木々との関わりを思い起こさせ，木々に対する思いを深めさせる。

○　思いを形に表させる。

どういう思いで，どういう工夫をしていくかをはっきりさせるため，アイデアスケッチをかかせる。製作では，そのアイデアスケッチをもとにしながら，試行を繰り返させる。

○　思いを互いに認め合わせる。

個々の思いを集団に紹介する中で，自分とは違った感じ方や表し方に気づかせ，互いに認め合う気持ちを育てたい。

(4) 評価の観点

造形への関心・意欲・態度	木の枝をよみがえらせようとする意欲を持つ。
発想や構想の能力	自分の思いをアイデアスケッチに込めようとしている。
創造的な能力	自分なりの工夫をして，木々をよみがえらせようとしている。
鑑賞の能力	友だちの作品のよいところを見つけようとしている。

(5) 指導の流れと児童の反応

① 第一次（2時間）

T：この間の台風19号の時のことを覚えていますか。

▷ 覚えてる・恐かった・凄かったんでぇ・・・・・と，口々に話す。相当心に残った出来事であったことが，うかがわれる。

C：近くの電信柱の電線が切れていて，恐かったです。看板が飛んで来ました。

C：僕の家の瓦やスレートが飛んでしまいました。・・・・・

T：大変だったね。学校も大変だったのだけど，気が付きましたか。

C：北校庭の木が折れて，道路をふさいでいた。

C：太い木だったのに，根元の方から裂かれたようになってたよ。

C：事務の先生が，痛んだ木を切っておられました。（見た・見たという声）

C：中学校の運動場の横の方に，切られた木がいっぱい集めてあるよ。

C：１年生の時から気に入っていたわたしの木が，なくなっているかも知れないと心配で，見に行きました。葉っぱは飛ばされていたけど，木は大丈夫だったので安心しました。

▷ 自分の思い出の木を心配する声が次々と出る。１・２年生の時，生活科で親しんでいた木なので，思い入れが強いようである。

T：外に出て，どうなっているか見てみましょう。

▷ 運動場に出る。自分が「ぼくの木」「わたしの木」として決めていた木が気にかかるらしくそれぞれ見に行っては，ほっとしたり，がっかりしたりしている。友だちと一緒に登った木・葉っぱで笛をつくった月桂樹の木などを，いとおしそうに見ている。
最後に，切られた木が山積みされている中学校運動場の隅に集合する。自分たちの背の何倍にもなるほど高く積み上げられている木々の無惨な姿に，声もない。

C：先生，この木は，どうなるの？

T：事務の先生に聞いたのだけど，もう少ししたら，全部この場で燃やしてしまうそうです。

C：ええーっ，そんなあ。かわいそうだよ。

▷ このまま燃やされてなくなってしまうのは，もったいないし，悲しいということで，自分たちで何とか残しておきたいということになった。そこで，自分たちで，自分たちの思い出の木をよみがえらせようということになったのである。そう決まった途端，沈んでいた子どもが，急に元気になった。「足場が悪いから気を付けなさい。」というわたしの言葉もそこそこに，自分の　気に入った木を探し始めた。のこぎりとビニール袋を用意する。

C：この曲がり具合いが，おもしろくて気に入っているの。

C：あっ，これ，ぼくが大好きだった木に似てる。

C：大きな木の皮だなあ。何かに使えそうだなあ。

▷ 子どもは，夢中で木を探す。のこぎりを使って，自分の気に入った所を切り取っているが，生木なので，切りにくい。友だちの手を借りて，汗だくで木を切る。直径１０㎝以上もある生木をいくつも輪切りにしている子もいる。あまりの手つきの危なさに見かねて，女子にかわって木を切ってやっている男子もいる。切ったあとののこくずをビニール袋に入れて，大切そうに持って帰る子もいた。どの子も満足そうであった。

▷ （教室で）持って帰った木をどうやってよみがえらせるか，自分で考えて，アイディアスケッチをかく。私なりに思いを込めてよみがえらせたものを見せてやると，思いはあるけれどどうしていいかわからない子も，イメージが湧いてきたようである。よみがえらせるのに必要な材料があれば，次の時間までに用意しておくよう話して，授業を終えた。

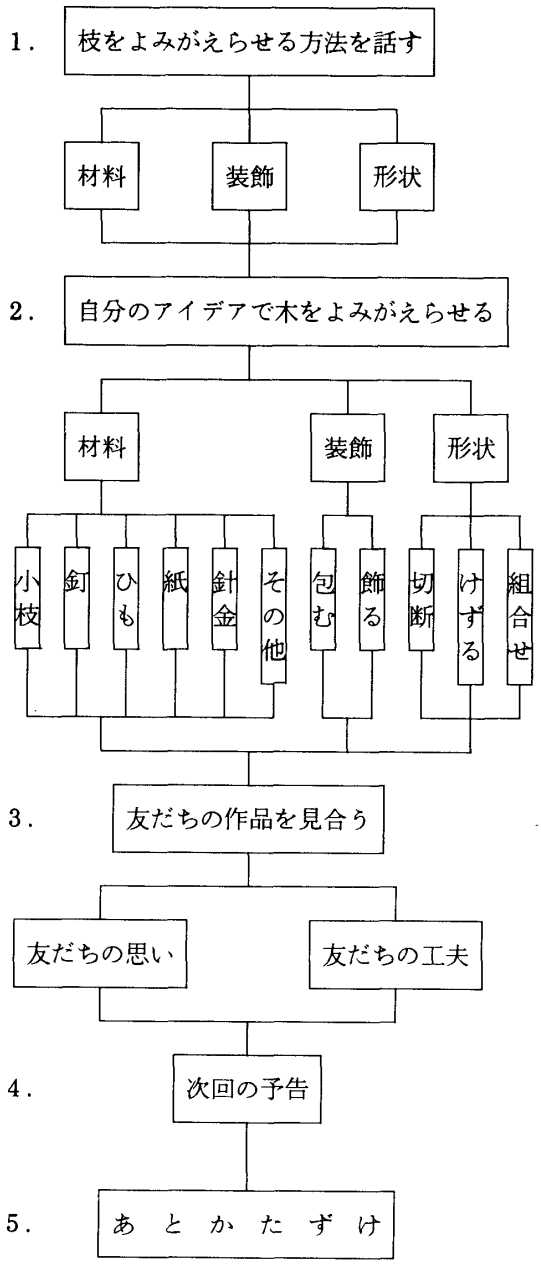
② 第二次（2時間） 本時 第二次第1時

○目標 木の枝に思いを込めて，自分なりの工夫をすることができる。

○準備 （児童）選んだ枝 アイデアスケッチ 必要な材料

（教師）全体で使える枝 のこぎり 金づち 釘 ひも 針金 紙

○指導過程と児童の反応・主な働きかけ

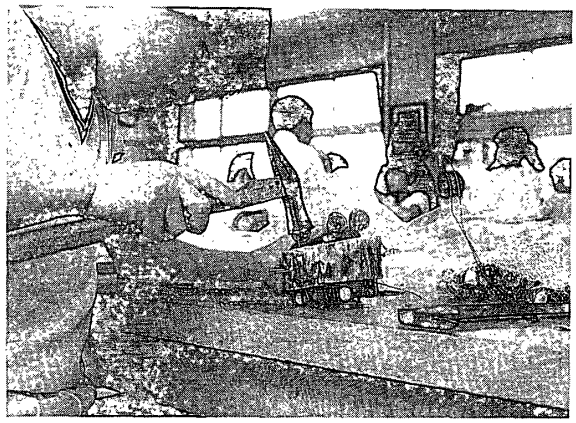
学習過程	児童の反応 ・ 主な働きかけ （◇）
	1．前時のアイデアスケッチを見ながら発表する（4名）ただどうするかという方法だけでなく自分の木に寄せる思いも話す。明るくてきれいな木・秋の木・生き生きした木・・・聞いている子は，早く始めたくてしかたない風。 ◇その思いよくわかる。◇いいアイデアだね。 2．自分のアイデアスケッチをもとに製作する。思いがはっきりしているらしく，すぐ活動に取りかかる。◇にこにこして活動を見守る。 ・自分で育てた綿を使うと話してくれる子 ・実にするため，針金でビー玉を包もうとする子にペンチの使い方を教えると，自分のものにしようと一生懸命見ている。 ・1時間中，ひたすらのこぎりで枝の輪切りをつくっている子 ・彫刻刀で彫っている子 ◇まわりながら思いをじっくり聞いてやる。 ◇子どもの考えを認めてやる。 ◇道具等の使い方をアドバイスする。 ◇安全面に留意する。 3．自分の気に入ったところや友だちのよいところを見つけさせようと思ったが，自分がつくりたいという思いが先立ち，手を休めぬまま，話を聞く状態であった。製作の時間をぎりぎりまで延ばす。◇つくりたい気持ちを認めてやる。 4．片付けをした後，続きの活動に必要なものや活動の反省を図工カードにかく。活動の後なのでより具体的に記述ができている。 ◇次の時間への期待感を伝える。

③ 第三次（1時間） 鑑賞

十分につくった後だったので，落ち着いて鑑賞できた。自分の気に入ったところを紹介したり，友だちのよいところを見つける活動を通して，お互いのよさを認め合う雰囲気ができた。

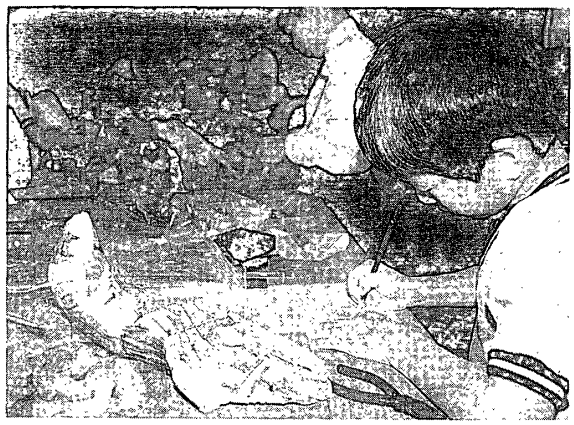
5．考察

(1) 題材の価値－仮説１の検証



仮説１にしたがって，「よみがえれ，ぼくの木・わたしの木」が，子ども一人ひとりにとって興味・関心・意欲の持てる題材であったか，また，この題材で，主体的に造形活動を展開していったかを，実践記録をもとに検証していきたい。

まず，興味・関心・意欲の持てる題材であったかどうかを，学習を終えての図工学習カードの記述から，考えていく。自分なりに木をよみがえらせることができたと満足している子どもが，35名中34名，あまりできなかったという子が１名であった。できなかった１名は，その理由を「もう少し木がほしかったから」と書いている。第二次の第１時が終わった時点で，ちょうど山積みの木が燃やされてしまって，思うものが調達できなかったためと考えられる。



また，学習を終えての感想を読んでみると，

・美しくなった木もたぶんよろこんでいるだろうなと思い，わたしも生き返らせてうれしい。
・自分で好きなように木をよみがえらせたので，とても楽しかった。
・まだやりたい。
・生木を切ったので，のこぎりで木を切るときのコツがわかりました。
・自分の願いがいろいろな木にとどいてくれたらいいと思う。

などの感想に加えて，

・中学校のグラウンドにおいてあった木が，全部焼けてしまったこと，悲しかった。
・今は木がぜんぜん残っていないので，じゅぎょうをしてよかったなと思いました。

という感想がたくさんあり，「たくさんの思い出の木は，もう焼かれてなくなっている。唯一残っているのは，自分たちがよみがえらせたこの木だけなんだ。」という，特別な思いが伝わってくる。

以上のことから，この題材が，子ども一人ひとりにとって興味・関心・意欲の持てる題材であったといえる。いつでもどこでもある状況ではないので，いつもできるわけではないが，子どもと一緒に生活する中で，あらゆる出来事・あらゆる環境に目を向け，アンテナをはっていくことが，題材開発につながるのである。

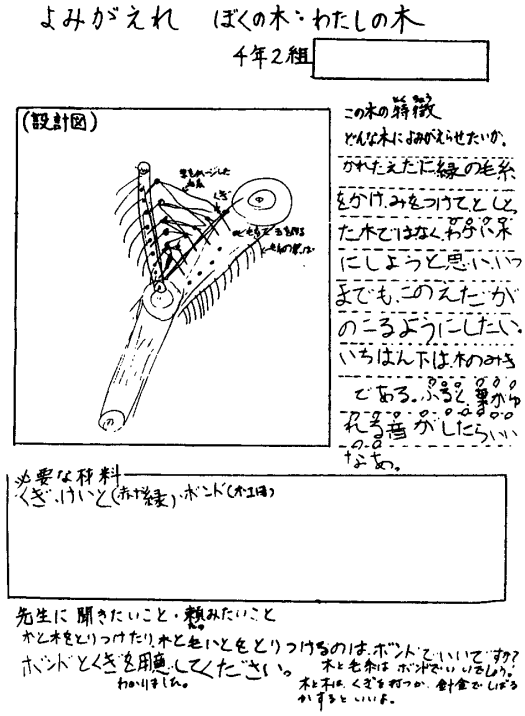
この興味・関心・意欲の持てる題材が，子どもの主体的な造形活動をうながしたかどうか，考えてみる。第一次の指導の流れと児童の反応をみてみると，どんな活動をどのようにしていくかを決めていったのは，すべて子どもである。教師は，子どもの気持ちに共感し，必要な道具を用意したりする支援が中心的な活動である。この題材により，子どもが自分の思いを持ち，主体的に造形活動を展開していったことから，造形遊びとして価値のある題材であったといえる。

(2) 子どもを生かす評価であったか

① 教師の評価－仮説２の検証

評価は，指導と表裏一体のものである。よい指導ができれば，よい評価となり，指導に問題があ

れば，評価も悪くなる。そのことをまず頭にいれておかねばならない。よい指導ができるためには，まず何をどのようにしようと考えているのか，どのくらいできるものなのか，きちんと実態を把握する必要がある。（診断的評価）図工カードに，自分の思い・必要な材料・先生に聞きたいこと頼みたいこと等を書かせるのは，子ども自身の自己評価という側面と，診断的評価としての側面がある。図工カードを綿密に見て，子どものつまづきを知り，次の時間での指導の参考にするのである。カードから子どものつくりたいものの傾向をまとめると，①釘とひもや針金で飾る（ビー玉転がしで既習）②針金とビー玉（宝物つくりで既習）③自然のものを組み合わせて飾る④彫刻刀で彫る・・・・・などである。かなづち・のこぎり・ペンチは既習の道具なので，安全面で特に配慮のいるのが，彫刻刀の扱いである。このようなことを考えて，次の授業に臨むのである。



授業の中での評価は，第二次第１時の指導過程と児童の反応・主な働きかけのところでわかるように，子どもがしていること・活動に対して，共感的な理解・幅のある認め・努力やよさの励まし・試みのきっかけをあたえること・あたたかい支援などが中心である。このように認められ理解されることにより，子どもたちは，自分のよさを知り，主体的に活動できるのである。ぎりぎりまで手を休めず，活動しつづけたことからも，自分の思いからの活動であることがわかる。

②子どもの評価

子どもの評価には，子ども相互の評価（相互評価）と自己評価がある。授業の中で，子どもどうしの「おっ，すごいな。」とか，「それ，どうやるん。」「きれいな木になったね。」「その材料が面白いね。」とかいうことばが聞かれた。友だちに認められるということは，こどもにとって，大きな喜びであり，自信につながるものであることが，嬉しそうな子どもの表情からうかがわれ，そのことにより，活動はより活発になった。また，つくりあげた後，じっくりと鑑賞する時間を設けたが，木々をよみがえらせたいという思いはおなじでも，その表現の仕方には様々なものがあるというのが，実感できたようである。図工カードの中には，友だちの作品で心に残ったもののことがたくさん書かれていた。

・○○さんのが，えだにたくさんのものをまきつけていて，とてもきれいだった。
・○○くんのは，切った枝に「大切」という文字が彫れていたので，すごい！
・○○くんが，一生懸命やっていたのがよくわかった。気持ちがよく表れている。
・○○さんのは，自分がつくった綿を使っていたので，かわいそうな木を喜ばせてあげようという思いがよくわかった。・・・・・

友だちの作品を通して感じたこれらの思いは，きっと次の造形活動に生きていくに違いない。

自己評価については，主として図工カードを書くことによって行ったが，自分で自分の活動を確かめながら，めあてをもって次の活動に入っていくのに役立ったようである。

①②のような評価を続けていくことにより，子どもは自分の思いを大切にして，自分が主体となった造形活動をしていくようになると考える。そのことこそ，「個が生きる」ということである。

(3) 指導を終えて

子どもが真に主体を持って造形活動していくためには，まだまだ時間が必要である。授業は，子どもの豊かな自己実現の場や機会であることを肝に銘じ，子どもたち一人一人が自分らしい主題や課題などを見つけ，自分のよさを生かして表現できるよう，支援のできる教師でありたい。そのための実践を積み重ねていきたい。

6．資料

造形遊びの評価は，作品よりそれまでの行為が主体であるが，作品には，子どもたち一人一人の思いが込められていることを忘れてはならない。どの作品も「宝」である。以下，子どもの作品写真を掲載しておく。

↑「私が育てた綿です。」

↓「木の形が面白いでしょう。釘のあたまには，色をぬっているんだよ。」

「楽器のハープみたいで
↓ きれいでしょ。」

↑「振ると，音が出るよ。」

↑「ひいらぎや南天・松ぼっくり・・・自然のもので飾るんだ。クリスマスツリーみたいでしょ。」

↑「自然を大切にという気持ちを込めて，自然と彫ったんだ。小刀で削った皮もちゃんとつけてあるよ。」

参考引用文献

初等教育資料ＮＯ．573「子どものよさを生かす学習指導と評価　図画工作」　西野範夫